

平成19年度 国語 (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は16ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

1 次の記事を読んで、後の問1〜問4に答えよ。

梅雨にはいる少しまえ、保本登は自分から医員用の上衣を着るようになった。薄鼠色に染めた木綿の筒袖と、たつつけに似たその袴とは、よく糊がきいてごわごわしており、初めて着たときには、人にじろじろ見られるようでかなり気まりが悪かった。

新出去定と森半太夫は黙っていたし、彼が上衣を着はじめたということにさえ、気づかないふりをしていた。他の医員たちも口では何も云わなかったが、彼を見るたびに皮肉な眼つきをしたり、唇にうす笑いをうかべたりするのが認められた。——こういう中で一人だけ、彼のためによりこび、それを正直に口に出して云った者がいた。それは台所で働いている、お雪という娘であった。お雪は登が上衣を着ているのを見るなり、まあと手を打ち合わせ、顔じゅうでこぼれるように微笑した。

「ようやく上衣をお召しなさいましたのね、よかったこととお雪は云った、「これでやっとあたしの勝ちになりましたわ」

「おまえの勝ちだつて」登は訝しうに訊いた、「誰かと賭けてでもいたのか」

「ええ」お雪はちよつと狼狽しながら、巧みに微笑でそれをつくろつた、「賭けたといえは賭けたんですけれど、あたし保本先生がそういうお気持ちになつて下さるようになつて、願つていたんですの」

「そういう気持ちとは、どういふことだ」

「この養生所におちついて下さるといふお気持ちですわ」お雪は勇敢に云つた、「あたしなんか云うのはおかしいでしょうけれど、ここにはいいお医者さまが必要です、本当に医者らしいお医者なら、ここでお仕事なさる気にならない筈はありませぬもの、そうでしょう」

登はそのとき気がついた。

——森半太夫の口まねだ。

お雪が半太夫を恋しているということは、津川玄三に聞き、またおゆみに付き添っているお杉からも聞いた。半太夫は無関心らしいが、お雪は夢中になっているという。森さんのお堅いのは立派だけれど、お雪さんの気持ちを考えると憎らしくなる、とお杉は云つた。登自身もときどき、二人で話しているようなところを見たことがある。通りかかった半太夫をお雪が呼びとめて、ちよつと立ち話をするといった程度であるが、いつかいちど、菓

園の柵さくのところ、お雪が泣いているのを見かけたことがあった。——晩春たそがれの黄昏たそがれだつたと思う。半太夫は腕組みをし、棒のように立って空を見あげており、その脇わきでお雪が、袂たもとで顔を掩おほつて泣いていた。かなりはなれていたうえに、登はすぐ眼をそむけて去つたが、うすく靄もやのかかった、片明かりの光の中で、二人の姿は影絵でも見るような、非現実的なものかなしさを感じさせたものだ。

——たしかに、これは半太夫の口まねだ。

登はそう思いながら、さりげない調子でお雪に云つた。

「それは森の意見なのか」

お雪はわるびれずに頷うなずき、微笑した、「ええ、森先生もそう仰おほしゃっていますわ」

「おれにはおれで意見があるさ」そう云つてから急に登は顔をしかめ、突つかかるような口ぶりになった、「森は自分をごまかしているんだ、誰だつて本心は出世をしたい、名をあげ産をなすことは、人間本来のもつとも強い、正当な欲望(注3)だ、赤髯あかひげはいいさ、彼はもう名医として知られているし、大名諸侯や富豪などから、礼を厚くして迎えられる、しかも門戸を構えもせず、こんな施療(注4)所で働いていることは、彼の名声をさらに高めるだけだろう、しかしおれたちはそうじゃあない、おれたちは無名の見習医だ、こんなところにいづまでもいれば、生涯無名のままで終わるほかはない、おれはそんなことはまっぴらだ」

「疲れていらつしゃるのよ、保本先生」とお雪は勅いたるように云つた、「そんな意地わるなことを仰しゃるのは、お疲れになつている証拠よ、いつておやすみなさいましな」

登は両手を垂れ、そして歩み去つた。

^B 彼は恥はずかしくなつた。お雪などにそんなことを云つたのが恥はずかしいばかりでなく、自分のしていることと、いま云つた言葉とに矛盾を感じたからである。いまお雪に云つたことは誇張(1)でも片意地でもない、常に考くえていることを正直に口に出したまでであるが、その反面、彼はこの養生所での仕事と、新出去定(2)につよくひきつけられていた。——嫌きらつていたその上衣を、すすんで着るようになったのは理由がある。けれども、彼の考えに變化が起こつていなくなつたら、とうていそんな気持ちにはならなかつたであらう。理由といつても変わったことではなく、単に一人の病人の言葉にすぎないからだ。

伝通院(3)の前をさがつた中富坂に「むじな長屋」と呼ばれる一画があり、そこは極端に貧しい人たちが住んでいることで知られていた。登は去定の供(注6)で、しばしばそこへ治療にいくうち、輻屋(注5)の佐八という病人を受持つようになった。年は四十五六だろう、骨太でがっちりした軀からだをしているが、明らかに労働(注6)にかかつており、見かけの逞たくましさとは逆に、激しい衰弱(4)と消耗が認められた。

——どうか本気になって養生するように仰しゃって下さい。

(注7) 差配の治兵衛は幾たびそう云ったかわからないし、去定もくり返して、きびしく安静を命じた。佐八はおとなしく承知をする。また、発熱や咳のひどいときには、仕事を休んで寝るようだが、少しでもぐあいがいいとすぐに起きあがって仕事をする。それをみつかつて咎められると、大きな顔ででれたように笑い、頭を掻きながら続けざまにおじぎをして、いかにも済まなそうに云うのであった。

——もうこれで片づきます、これが片づいたらすぐに寝ます、本当に寝ますから。

佐八は若いころいちど結婚したが、僅か半年ばかりで別れてしまい、それ以来ずっと独りぐらしだという。腕も相当だしよく稼ぐけれども、例のなほど無欲で、稼いだものはみな人のために遣ってしまい、自分はいまだに家財道具も満足に揃っていない、と差配の治兵衛から聞いたことがあった。

その佐八が或るとき、不審そうに登のようすを眺めながら、貴方はどうして養生所の上衣を着ないのか、と問いかけた。あれは官制ではないからだ、と登は答えた。去定が独断できめたもので、べつに規定されたものではない。だから着ようと着まいと勝手なのだ云った。

佐八は登から眼をそむけながら、独り言のように呟いた。

——あの上衣は人助けですがね。

彼はそう云った。

——あれを見れば養生所の先生だということがすぐにわかります、私どものような貧乏人は、養生所へはいきたがらないのですが、通りかかった先生を見れば、治療に寄っていただきたい人間がたくさんいます、私なんぞはなによりありがたい上衣だと思えますがな。

その上衣はべつの意味をもっていた。動作に便利なのと、清潔さを保つこと、患者の汚物でよれたりすれば、すぐに取り換えられることなどで、仮によいながらも、夏は毎日、冬は隔日に着替えるきまりになっている。去定はそういう点でもちい始めたのであろうが、佐八の言葉を聞いて、そこにも意味のあることを、登はひそかに承認したのだ。

(山本周五郎『赤ひげ診療譚』による。)

(注1) たっつけ —— 膝から下を細く仕立てた袴。

(注2) 養生所 —— 診療所。ここでは小石川養生所のこと。

(注3) 赤髯 —— 新出去定のこと。まわりからこう呼ばれていた。

(注4) 施療所 —— 無料で病気を治療するところ。

(注5) 輻屋——車の輻(車輪の中心部からまわりへ放射状に出ている棒)を作る人。

(注6) 劳咳——肺結核。

(注7) 差配——家主や地主に代わって、貸し家や貸し地を管理する人。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) 巧み

- ① ふく(み)
- ② はず(み)
- ③ ところ(み)
- ④ たく(み)
- ⑤ たの(み)

(イ) 誇張

- ① かくちよう
- ② こちよう
- ③ ぼうちよう
- ④ きちよう
- ⑤ きようちよう

(ウ) 衰弱

- ① あいじゃく
- ② せいじゃく
- ③ きよじゃく
- ④ ぜいじゃく
- ⑤ すいじゃく

(エ) 稼ぐ

- ① しの(ぐ)
- ② とつ(ぐ)
- ③ みつ(ぐ)
- ④ かせ(ぐ)
- ⑤ つむ(ぐ)

(オ) 不審

- ① ふしん
- ② ふまん
- ③ ふあん
- ④ ふばん
- ⑤ ふそん

問2 傍線部A お雪は登が上衣を着ているのを見るなり、まあと手を打ち合わせ、顔じゆうでこぼれるように微笑した。とあるが、この時のお雪

の気持ちはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 医員全員が上衣を着るといふきまりを守ることになり、これで養生所の雰囲気がよくなるだろうとほっとしている。
- ② 登が上衣をやっと着てくれたことをうれしく思うよりも、森との賭けに勝つことができ得意になっている。
- ③ 登がこの養生所に腰を落ち着ける気持ちになったのを知り、登のためにも養生所のためにもよかったと思っている。
- ④ 自分と森が登の心配をしてきたことを積極的に訴えることで、登と森の仲を取り持とうとしている。
- ⑤ 登と他の医者たちがなじまないでいる中で、自分だけが登の本心を察していたことに優越感を抱いている。

問3 傍線部B 彼は恥ずかしくなった。 とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

- ① 本当は以前からこの養生所で仕事をしたいと思っていたのに、気持ちが高ぶって思ってもいないことを口走ってしまったから。
- ② お雪に対して感情的になってしまったという大人げなさを恥じるとともに、お雪の態度に自分をさげすむような気持ちを感じてしまったから。
- ③ お雪の森への思いに嫉妬して彼への批判をぶちまけてしまったが、それにより一層自分は森に人間としてかなわないと思いつたから。
- ④ 興奮して自分の本心を口にしてしまったが、今言ったことがお雪の口から森へと伝わってしまうかもしれないと後になって思ったから。
- ⑤ 本心をお雪にさらけ出してしまったことと同時に、養生所に反発しながらもそれに魅力を感じつつある自分の屈折した感情に気付いたから。

問4 傍線部C 嫌っていたその上衣を、すすんで着るようになったのは理由がある。 とあるが、登が上衣を着るようになったのはなぜか。最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 上衣を着ていない自分がいくら言っても患者は言われたとおりに養生せず、医師として信用されるためには上衣が必要だとわかったから。
- ② 将来去定のような立派な医師になり名声を手に入れるためには、周囲の期待に沿い上衣を着て働くほうが得策だと気付いたから。
- ③ 去定が定めた上衣にはだれもが診療を頼みやすくする養生所の印としての意味もあることに気付き、それを認める気持ちになったから。
- ④ 上衣は養生所の制服であるということ以上に、動きやすさや衛生面でもたいへん優れたものであることがやつと理解できたから。
- ⑤ 貧しくとも自分の身をかえりみず働く佐八の生き方に心を動かされ、登を思い助言してくれた彼の遺言にこたえたいと思ったから。

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

単語や語句の選択や用法を誤ると、せっかくのいい内容もきちんと伝わらない。「将棋を指す」「碁を打つ」という伝統的な言いまわしを知らずに、動詞を逆に使ったり、どちらも「指す」あるいは「打つ」で統一をとったり、両方「する」で間に合わせたりする程度なら、情報伝達のうえでそれほど致命的な結果にはならない。ただそれも、ごくまれであれば愛嬌^{あいせう}程度ですむが、数が多くなるといささか教養を疑われる。

実用にさしつかえる誤用もある。役が不相応に軽いという意味の「役不足」ということばが、近年「力不足」と混同してか、しばしば謙遜^{けんそん}のニュアンスで使われる。「気のおける」と「気のおけない」の意味を反対に覚え込んでいる人も増えたいらしい。だが、親しい人を「気のおける相手」と書いたりすると冷淡な人間だと思われるし、社長を「気のおけない相手」にしてしまうと偉ぶっている感じを与えて、いずれも情報伝達そのものに支障をきたす。もつとも、読む側も同じ誤解をしていけば、たまたまうまく伝わるわけだが、ふつうは、反対の意味に伝わったことにさえ気づかずに話が進み、だいたい後になってから、話の行き違いに首をひねることになりやすい。文章の場合はその場で相手の反応がつかめないから、最後まで気がつかないままになるかもしれない。

以下に、しばしば見られる誤りの例を列挙する。古いところから始めると、比況の助動詞「みたいだ」の連用形「みたいに」が、形容詞の活用と混同して「馬みたく長い顔」のようになる誤りがよく見られる。

「いまだに」は「いまだに」に「に」のついたことばだ。漢字で書くなら「未来」の「未」を用い「未だ^{いま}」となる。だから、まだ実現していない状態が継続している場合に「いまだに行方が知れない」などと使うのが本来の用法だ。それが次第に、未実現という否定のニュアンスが薄れ、「いまだに漫画ばかり読んでいる」のように、単にある状態が続いている場合に広く使うようになった。そのため、意識の変化とともに表記もゆれ、「今だに現役だ」などと書く例もしばしば目にする。「今」に「だに」が寄生したようなこの用字は避けたい。論文のような格式ばった文章やアラタまった書簡などでは、「いまだに」という語のこういう用法も差し控え、「今でも」「今もって」などと書くようにしたい。

「低め」の反対は「高め」、「短め」の反対は「長め」、「遅め」の反対は「早め」で何の問題もない。「少なめ」の反対も「多め」でいいが、「オー」という音だけで意味が正確に伝わるか不安な場合は「多いめ」ということもある。「薄め」の反対は「濃め」となるが、「コ」だけでは「濃い」という意味が伝わるかどうか心もとなく思うせいか、「濃いめ」という人のほうが圧倒的に多い。文章に書く場合は、漢字を使うかぎり意味の問題は解決されるから、原則どおり「多め」と書きたい。「濃め」の形がどうしても気になるなら、「少し濃く」などと表現を工夫する。

「途でもない」から転じたとされる「とんでもない」は、全体で「せつない」「やるせない」のような一つの形容詞になっているものとしてあつかう。それ

を「デス・マス体で使うときはどうなるのだろう。標準語では、形容詞に直接「だ」をつけて「若いだ」「うれしいだ」のようにする用法はない。「だ」をつけるときは、それを体言化して「若いのだ」「うれしいことだ」などとする。「です」をつけた「若いです」「うれしいです」といった形はすっかり定着してしまった。が、これとて「でした」と過去形にしにくい変則的なことばだ。「だ」のつかないものに「です」をつけるこの形は、伝統的な日本語になじまないとして「^(イ)ケイエンする人もまだいる。「とんでもないです」の形もしっくりしないと感じる人がいそうだ。「だ」の場合と同様、「とんでもないことです」とすれば問題はない。もっと丁寧な形にしたいときは、「とんでもないことでございます」とする。「寒うございます」「おいしゅうございました」のような音便形を用いて、「とんでもものうございます」と表現してもいい。

近年、「とんでもありません」「とんでもございません」の形が流行している。これは「せつない」を「せつありません」、「やるせない」を「やるせございません」とすることにあたる。まだ広く世間で認められていない誤用としてやりだまにあがることもある。文章は一般に会話より保守的だから、その形は避けたほうが無難だろう。

五段活用の動詞の可能形「動ける」「聞ける」「走れる」などからの類推もあって、近年「れる」と「られる」との伝統的な使い分けがすたれ、一段活用の動詞の場合でも無差別に「見れる」「寝れる」「生かれる」のようにいう傾向が、今や日本をおおいつつある印象を受ける。政治家でも学者でもしばしば使っており、若い世代を超えて年寄りの間にもシントウしてきた。もはや誤用だとして一蹴^(ウ)できない勢いになっており、話しことばの新しい語形として認知すべき段階に達したような情勢だ。

この手抜き*の*いわゆるラ抜きことばは、それでもまだ、さいわい例外を残しているように見える。レの音の次に「れる」が続くと発音しにくいせい
か、「入れれる」「隠れれる」という言い方はほとんど聞かない。また、くだけた会話で使いにくい「得る」「告げる」のような文体的なレベルの高い動詞の場合も、「得れる」「告げれる」といった形を見た記憶がない。満面に笑みや憂いを「^(タ)湛える」ように監督からチュウモン^(ト)された俳優が、もし「^(ナ)湛えれない」などと答えたら、表現の趣はふつとぶ。演技力より前に、まず日本語感覚のなさでハイギョウしそうだ。書きことばでは、特に品格を大事にする文章では、ラ抜きことばが味わいをそこねる一因となることは頭に入れておきたい。

「今ひとつ」の意の「いまいち」や、最近「なにげなく」の意味で使われたという「なにげに」のような新語や俗語などは、文章ではなおさら避けたいところである。

「耳ざわり」は耳に「障る」ことであって、聞いて不快に感じる場合に「耳障りな音」などと使ってきた。ところが近年、「触る」という意味に解釈して「耳ざわりのいいことば」などという使い方が広まった。伝統的な表現を尊重する立場からは、「耳あたり」とでもするか、「耳に心地よい」「聞いて感じるのいい」などとほべすことが望ましい。

慣用句やことわざでも、こういう乱れに注意したい。流れに乗る意味の「流れに棹さす」が、逆に流れに逆らうという意味にしばしば誤解されるとい
う。「情けは人のためならず」も、誤解されている例としてよく話題になる。他人のためだけでなく自分に戻ってくるという意味を、その相手
自身のためにならないという意味に誤解する人が多くなってきたというのだ。そのほか、「溺れる者は藁をもつかむ」「枯れ木も山の賑わい」「かわいい
子には旅をさせよ」「住めば都」などもニュアンスがぐらつきだしたようだ。

ほこりをかぶった国語辞典の出番である。

(中村明『文章の技 書きたい人への77のヒント』による。)

問 1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) アラタまった

⑤ 緊 ④ 改 ③ 新 ② 直 ① 謹

(イ) ケイエン

⑤ 啓 ④ 形 ③ 経 ② 敬 ① 計

(ウ) シントウ

⑤ 深 ④ 伸 ③ 進 ② 浸 ① 侵

(エ) チュウモン

⑤ 文 ④ 聞 ③ 問 ② 門 ① 紋

(オ) ハイギョウ

⑤ 背 ④ 配 ③ 靡 ② 敗 ① 拌

問2 波線部の語句が本来の用法として最も適切に使われているものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 会長のような重要な職を務めるのは、わたしには役不足です。
- ② 彼とは小学校からのつきあいで、僕にとっては気のおけない友人です。
- ③ 彼の発言は、会議の流れに棹さすような唯一の反対意見だった。
- ④ 「情けは人のためならず」と言うとおり、彼には厳しい処分が必要だ。
- ⑤ 「枯れ木も山の賑わい」ですので、先生どうぞお越しくください。

問3 傍線部A 最後まで気がつかないままになるかもしれない とあるが、それはなぜだと筆者は述べているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 書き手と読む側との間に隔たりがあり、返事や表情・しぐさなどから相手の解釈を推し量ることが難しいから。
- ② 書き手と読む側との間に第三者が介入することで、話の内容がねじ曲げられることが多くなるから。
- ③ 書き手には思い込みの強い人が多いため、読む側の気持ちを考えずに独断的な思考に陥りやすいから。
- ④ 書き手の意図する内容にかかわらず、読む側の自分勝手な解釈が入り込んでしまうのが常だから。
- ⑤ 書き手と読む側とにそれぞれ固有の価値観があるため、互いのすべてを理解し合うことは不可能だから。

問4 傍線部B もはや誤用だとして一蹴できない勢いになっており、話しことばの新しい語形として認知すべき段階に達したような情勢だ。 とあるが、ここに表れている筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① ラ抜きことばは、話しことばにおいても、政治家や学者だけでなく多くの人が使うように促すべきである。
- ② ラ抜きことばは政治家や学者が使っているので、話しことばでも正式に使用を認めるべきである。
- ③ ラ抜きことばは多くの人が違和感を持っているので、早急に使わないようにするべきである。
- ④ ラ抜きことばは広く世間で使われており、話しことばとして容認することもやむをえない状況である。
- ⑤ ラ抜きことばは明らかに誤用であり、すべての世代の人が使ってはならないものである。

問5 文中の空欄

に入るまよめのことばとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① ことばは変化していくが、文章は日常会話よりも保守的になりやすい。文章にも、日常会話の流行を積極的に取り入れたい。
- ② 不適切なことばの使用が続くと、やがて相手から信用されなくなる。日常会話では、文章以上に大切にことばを選びたい。
- ③ ことばの誤用も状況によっては、その場をなごやかにする。日常会話では、文章ほど気を遣わずに発言したい。
- ④ ことばの選択や用法を誤ると、伝えたいことが正確に伝わらない。日常会話では、常に伝統的な表現を尊重したい。
- ⑤ ことばの不注意な用法が重なると、やがてコミュニケーションを妨げるまでになる。文章では、日常会話以上に慎重に運びたい。

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

今は昔^(注1)、比叡^(注2)の山に僧ありけり。いと便りなかりけるが、鞍馬^(注3)に七日ばかり参らん。とて参りけり。夢^Aなどや見ゆるとて参りけれど、見えざりければ、いま七日とて参りけれど、なほ見えざりければ、また七日延べて参りけれど、なほ見えねば、七日を延べ延べして、百日参りけり。その百日といふ夜の夢に見るやう、「我はえ知らず。清水^(注4)へ参れ。」と仰せられければ、明くるより京に下りて、清水へ参り歩く。百日参りて後に、「えこそ己れに便り付くまじけれ。賀茂^(注5)に参りて申せ。」と仰せられければ、また賀茂に参りて、七日ばかりと思へど、例の夢見ん見んと参り歩きけるほどに、百日といふ夜の夢に、「わ僧^Bがかく参るがいとほしくて。歩いてただにあらん、いとほし。御幣紙^(注6)、打撒^(注7)きの米ほどの物、たしかに取らせむ。」と見て、うち驚きたる心地、いといと心憂く、あはれに悲し。^(注8)「所々、かくのみ仰せらるる、打撒きの米の代はりばかり給ひて、何にかせん。我、京へ帰らで、山へ登らんも、人目はづかし。賀茂川にや落ち入りなまし。」と思へど、またさすがに、「いかやうにせさせ給ふべきにか。」と、ゆかしくおぼえけり。さりとてあるべきならねば、もとの所に帰りてゐたるほどに、我が知りたる所より、「物申し候はん。」と言ふ人あり。「誰ぞ。」とて見れば、白き長櫃^(注9)を荷はせて、縁^(注10)に置いて帰りぬ。「いとあやし。」と思ひて、使ひ尋ぬれど、おほかたなし。これを開けて見れば、白き米とよき紙とを、一長櫃入れたり。「これは見し夢のままなりけり。さりと、おのづから異便りもやとこそ思ひつれ、ただこればかりを、まことに返し賜びたる。」と、いと心憂く思へど、「いかがはせん。」とて、この米をよろづに使ふに、ただ同じ多きにて、失すること、ゆめになし。されば、紙も米もをほしきに取り使へど、失することなく、同じ多きなれば、別にいときらきらしからねど、いと楽しき法師にてぞありける。なほ物語ではすべきなり。

(『古本説話集』による。)

(注1) 比叡の山——比叡山延暦寺。

(注2) 便りなかりける——貧しい生活をしていた。

(注3) 鞍馬——鞍馬寺。京都市左京区にある。

(注4) 清水——清水寺。京都市東山区にある。

(注5) 賀茂——上賀茂神社・下賀茂(下鴨)神社の総称。京都市中北部にある。

(注6) 御幣紙——神に祈るとき捧げる供物用の紙。

(注7) 打撒きの米——魔よけの祓はらいに撒く米。

(注8) 所々——どこにお参りしても。

(注9) 長櫃——衣類・調度などを入れる木の箱。

(注10) をほしきに——「おぼしきに」で、思いどおりに。

問1 傍線部A 夢などや見ゆるとて参りけれ とあるが、比叡山の僧はどのような夢のお告げを期待してお参りしたのか。最も適当なものを、次の

①く⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

① 高僧になって人々を救うことになるという夢のお告げ。

② 百日かかるお参りを七日で終わらせることができるような夢のお告げ。

③ 御幣紙や打撒きの米を与えられるという夢のお告げ。

④ 貧しい生活から逃れることができるという夢のお告げ。

⑤ 消息を知りたいと思っている人から手紙が来るという夢のお告げ。

問2 傍線部B わ僧がかく参るがいとほしくて。歩いてただにあらん、いとほし。 とあるが、どのようなことに対して気の毒だというのか。最も

適当なものを、次の①く⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

① 僧は比叡の山から追放されてしまい、賀茂に来ることしかできなくなったこと。

② 僧が何日もお参りをしたのに、期待どおりの夢のお告げが得られなかったこと。

③ 僧は歩いていくしか方法がなかったため、百日目には疲れて一歩も動けなくなったこと。

④ 僧が何か所もお参りをしたので、多くのお供えが必要になり出費が重なったこと。

⑤ 僧が徒歩で一軒一軒の家を回り、御幣紙や打撒きの米を配らなければならなかったこと。

問3 傍線部C ゆかしくおぼえけり とあるが、僧が興味をもったことは何か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 20。

- ① 神仏は信心深い者に対してどのような恵みを与えてくれるのかということ。
- ② 打撒きの米を配って歩いたことに対する世間の評判はどのようなものかということ。
- ③ 京へ帰ってぜいたくな生活をしたら世間の人々はどのように思うかということ。
- ④ 京へ帰らず山にこもる生活を続けたら比叡山の他の僧たちはどのように思うかということ。
- ⑤ 神仏は賀茂川のほとりで待つ自分の前にどのような姿で現れるかということ。

問4 傍線部D いと心憂く とあるが、僧がこのように感じた理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

21。

- ① 賀茂で見た夢のお告げと異なり、粗末な物ばかりが長櫃の中に入っていたから。
- ② 白い長櫃をかついで来た人は、衣服が粗末で思いのほか身分の低い人だったから。
- ③ 賀茂にお参りをして百日目の夜に見た夢のお告げのとおり、長櫃の中が紙と米だけだったから。
- ④ 自分の手に入るものだと思っていた長櫃の米と紙を、返さなくてはならなくなったから。
- ⑤ 長櫃の中の紙が、音信不通であった知人の消息を知らせる手紙ではなかったから。

問5 本文の内容と合致しているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 比叡山の僧は、人々に紙と米とを与えたため多くの信頼を寄せられて、裕福で楽しい生活を送ることができた。
- ② 比叡山の僧は、欲張っているいろいろな寺社をお参りしたために神仏から不信心を持たれ、御利益を得られなかった。
- ③ 比叡山の僧は、賀茂にお参りしても全く神仏のお告げを聞くことができなかつたので、とても悲しく思った。
- ④ 比叡山の僧は、自分の所に届いた白い長櫃を開けてみたところ、期待していた以上の物だったのでとても喜んだ。
- ⑤ 比叡山の僧は、最初は夢のお告げに落胆したが、もらった紙や米は使っても減らないという御利益を得ることができた。

次の文章を読んで、後の問1〜問5に答えよ。(設問の都合で会話記号「」を省いたところがある。)

秦興^(注1)レ師^シ臨^ヲレ周^ニ、而^{シテ}求^ムニ九鼎^(注2)。周君患^{ウレ}レ之^ヲ、以^テ告^グニ顔率^(注3)。顔率曰^{ハク}、「大王勿^{ナカレ}レ憂^{フル}。臣請^フ東^{シテ}

借^{ラント}ニ救^{ヒラ}於^ニ齊^(注4)。」顔率至^リニ齊^ニ、謂^{ハヒテ}ニ齊王^(注5)曰^{ハク}、「夫秦之於^ニ無^ク道^ヤ也、欲^スニ興^シレ兵^ヲ臨^{ンテ}周^ニ而^{シテ}求^ムニ九鼎^(注6)。」

周之君臣、内自^ニ尽^クレ計^ヲ。与^ルレ秦^ニ、不^{ザト}レ若^{シカ}レ歸^{スル}ニ之^ヲ。夫存^{スル}ニ危^クレ國^ヲ、美名^{ナリ}也。得^ルニ九鼎^ヲ、厚^ク

宝^{トシテ}也。願^{ハクハ}ニ大王^ニ図^レ之^ヲ。齊王大^{イニ}悦^{ヨロコビテ}、発^シニ師^ヲ五万人^ヲ、使^{シム}ニ陳臣思^ヲ將^{トシテ}以^テ救^フレ周^ヲ。而^{シテ}秦兵^ヲ

罷^{ヤム}。

(『戦国策』による。)

(注1) 秦興師臨周——秦(国名)が軍隊を繰り出し、周(国名)のころは、弱小の一諸侯に過ぎなかつた。)に攻め寄せて。

(注2) 九鼎——夏・殷・周にわたって、天子の宝とされていたもの。

(注3) 顔率——人名。周の臣。

(注4) 齊——国名。

(注5) 於——ここでは「為」の意。

(注6) 陳臣思——人名。齊王の一族。

問1 傍線部A 曰とあるが、顔率の発言はどこまでか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

23。

① 求九鼎。

② 内自尽計。

③ 歸之大国。

④ 厚宝也。

⑤ 大王凶之。

問2 傍線部B 不若歸之大国とは、どういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24。

① 周の九鼎を秦に差し出すべきだということ。

② 周の九鼎を齊に贈った方がよいということ。

③ 周の九鼎を戦いに勝つ国に渡した方がましだということ。

④ 秦の軍隊を自国に戻す方が先決だということ。

⑤ 秦の軍隊を周にとどめるようなものだということ。

問3 傍線部C 凶之とあるが、どのようなことを「凶れ」と言っているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は

25。

① 齊が周と手を組むこと。

② 齊が秦の野望に荷担しないこと。

③ 齊が秦とひそかに連合すること。

④ 周が齊の信頼を裏切ること。

⑤ 周が齊を積極的に救済すること。

問4 本文の内容と合致しているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

26。

- ① 周君は国の行く末を心配して顔率に相談したが、顔率は明確に答えることができなかった。
- ② 周君は斉に追いつめられ、斉王説得の最後の手段として顔率を派遣した。
- ③ 斉王は顔率の考えを受け入れ、大軍を秦に派遣して斉の国土を防衛しようとした。
- ④ 顔率は周を守るために、九鼎を護ることをほめかして斉王を説得した。
- ⑤ 顔率は九鼎を守ろうとして、秦と斉とを対立させようとしたがうまくいかなかった。

問5 「九鼎」の動きを説明しているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

27。

- ① 九鼎は周から斉に持ち出されたが、再び戻ってきて、今は周に存在している。
- ② 九鼎は周から秦に持ち出されたが、秦は斉に贈り、今は斉に存在している。
- ③ 九鼎は周から秦に贈られたが、斉が奪い取って、今は斉に存在している。
- ④ 九鼎は始めから終わりまでまったく動かず、今もそのまま周に存在している。
- ⑤ 九鼎は始めから秦にあり、斉が奪い取ろうとしたが果たせず、今もそのまま秦に存在している。